

第二百七十八話 頑迷だけではない陸軍の終戦構想実現努力

当メモランダム 204 話「戦争終末構想破綻後の終戦構想、終戦機会の捕捉」3(2)項「海軍の終戦構想、そして陸軍」において、『陸軍も参謀本部戦争指導班が戦争指導構想を模索していたが、その要因はソ連要因であった。』と述べた。海軍や宮中、重臣グループの記述に比すれば、簡略に過ぎた。通悦では、頑迷で主戦派であった陸軍を、早期講和派が抑えて戦争終結に至ったとされる。陸軍は果たして、頑迷一辺倒であったのか？戦争終末に向けて、何らの動きもなかったのか？国策に何の影響をも及ばさなかったのか？



1 陸軍の戦争指導部署(終戦に係る検討等組織)

戦争指導部署は、当初戦争指導班次いで戦争指導課と改称され、作戦部作戦課と並立していたが、のち参謀総長・次長直轄の戦争指導班(第20班)として独立した。作戦を推進する立場と終戦を模索する立場は、相容れない面があるが、逆に密接な関係も求められるものだ。並立 or 分置何れがベターか？

2 戦争指導課(班)の終戦方策の模索、オーソライズ化、多数派工作等

天皇の戦争終結の意向を受け、杉山参謀総長は、早期講和に関する研究を命じ、戦争指導課は、1943/3/25には研究を開始したと推測される。

(1) 当初の終戦研究：独ソ和平の斡旋による勝利パターン(日独伊ソ四国協商)追求、主戦派と軌を一にしている。

(2) 1943/7 「長期戦争指導要綱(案)」案出

作戦課の「5か年長期戦争指導計画」をベース

(3) 1943年「大東亜戦争終末方策」(8月案と9月案あり)

イタリア降伏、独の戦況悪化(独ソ戦)、米軍の反攻急など、所謂「腹案」構想の破綻により新たな終末方策を案出した。特に9月案は、日本の単独・早期講和を企図した案と目され、自主的に終結を目指すものであった。両案ともにソ連仲介による終戦工作の必要性を説いており、戦況推移を悲観的に捉えていた。講和(譲歩)条件をも二通り検討している。ソ連に対する譲歩案も検討。本方策は、陸軍上層部へ報告

(4) 1944/3/15「戦争指導に関する観察(第三案)」の案出

5つの案のうち第3案が妥当との認識のもとに案出されたものである。独の急変(独ソ戦の更なる戦況悪化や独の英米との単独和平?)、日本の戦力低下を受けて、対米一撃論により終戦を有利にし、早期戦争終結を国策として決定すべきとの結論。

独の降伏前提なるも今なお独健在であり、ソ連の対日参戦の可能性が低い内に対米決戦で機を掴み、大本営・政府認識の統一を期し、天皇の裁可を得るという構想。

(5) 第三案のオーソライズ化、合意形成

本案は作戦課に容れられず、陸軍においては少数派であった。が、陸軍外の海軍、外務、その他の方面との密接な関係を維持した。重光外相、予備役陸軍中將を通じての近衛文麿等重臣との関係は密であり、高松宮が戦争終結勢力のトップだった。

この頃から東条内閣打倒工作が活発化した。戦争指導班は更に研究を深化させたが、7月頃には、日独の敗北を認めつつも、引き続きソ連仲介に期待を寄せている。新参謀総長・陸軍大臣等への根回し・説得工作、主戦派の更迭等があった。とは言え、早期和平派が大勢となった訳ではないが、陸軍内のこの動きは評価されてよい。

3 若干の観察

陸軍にも軍事情勢を冷静に分析して、早期講和に向けての研究や動きがあった。その小さな動きは、陸軍外の組織とも連携しつつ、やがて大きな流れの一翼を担った。他に依存しない終戦構想、敗勢濃い場合の終戦構想、自主的終戦構想策定等参考になる。

(了)